

信州大学教育学部附属松本小学校における 水書用筆を用いた書写学習に関する試み － 第1学年授業「筆となかよくなりたいたい」－

信州大学教育学部附属松本小学校 大野 征二
信州大学教育学部附属松本小学校 湯浅 健吾
信州大学教育学部 小林比出代

1. 研究の目的と方法

昨年度(2020年度)に完全実施となった現行小学校学習指導要領「国語科書写」での一番の改訂点は、第1及び第2学年の書写学習に「水書用筆を使用した運筆指導」を導入した点にある。当該学習指導要領の「国語科書写」における、第1及び第2学年の指導内容「水書用筆等を使用した運筆指導を取り入れるなど、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが望ましい。」との策定に則り、これまで鉛筆を用いた硬筆の授業のみであった小学校第1及び2学年の書写の授業に「水書での毛筆の授業」が新設されることとなった。

日本の文字の基礎は毛筆に拠る。小学校低学年における「水書での毛筆の授業」の目的は、従来硬筆のみだった書写の授業に加えて、毛筆の疑似学習を設定し、日本の文字の基礎(とめ、はね、払い等)を元来の筆記用具すなわち毛筆によって理解会得し、正しい文字の書き方及び運筆を習熟することにある。小学校低学年における毛筆の疑似学習は、児童が書字動作上抱える課題と対峙するために、日本で日常用いている漢字や仮名を作った元々の筆記用具＝毛筆を用いることによって、児童が書字動作に関する理解を深めることに主眼を置く。

一方、これまでの書写学習では、児童の手指の巧緻性等といった発達段階を考慮し、一貫して小学校第3学年を毛筆学習の導入期としてきた。これまでの在り方と新たに求められた現況をふまえて、現在教育現場は、小学校低学年での毛筆の疑似学習に関する指導内容や方法について模索の最中にある。

信州大学教育学部附属松本小学校は、2016年度より文部科学省研究開発学校指定を受け、附属幼稚園と附属松本中学校とともに「附属松本学校園」として幼小中一貫教育の研究開発に取り組んでいる。「令和3年度研究開発実施計画書」には、「研究仮説」における期待する具体的成果を、「『子どもたちの意欲を高めやりたいことを深める学び』『一人一人の能力、適性等に応じた学び』が実現し、資質・能力を養う教育課程の編成と実施・評価改善が行われるようになること」とした上で、「教師が、何らかの方法や理論に拘泥するなどといった技術的合理主義の科学観から転換し、子どもの学びを支える自身の在り様を探求し続ける取組」を見据えて、「小学校低学年において新設した「学びの領域」の継続」を掲げている。水書用筆及び水書用筆を用いた学習は、運筆の面白さを繰り返し試して体感できるため、幼児期に「遊びに打ち込む」中で探究を重ねてきた附属松本小学校第1学年の児童に適している。また、この考え方は、附属松本学校園で取り組んでいる幼小中一貫教育の在り方に合致する。

本研究は、幼小接続の充実及び幼小中の連携教育を図る姿勢に鑑みながら、現行小学校学習指導要領の告示に対応出来るよう、小学校第1学年の児童が「毛筆と遊び、毛筆とお友達になる」との学習のねらいに向けて、書写の授業における指導内容及び方法に関する研究開発に臨み、これからの授業実践に寄与できるよう検討を試みるものである。

なお、本研究は次のように担当の上遂行した。

大野 [附属松本小学校兼幼稚園副校長]：研究計画／学習(授業)内容に関する示唆及び分析

湯浅 [1年東組担任]：研究計画／学習(授業)内容の検討と実践及び分析／授業案作成及び研究授業者

小林 [学部教員]：全体総括／学習(授業)内容の検討と示唆及び分析

2. 単元名「筆となかよくなりたい」設定の背景

2-1. 「学びの総合化」の各過程

附属松本小学校園は2016年度から4年間の開発の中で、「学びの総合化」の視座に基づいて、幼小中一貫教育の教育課程を設定した。「学びの総合化」の教育課程には、【遊び】(幼稚園)→【遊びの領域化】(小学校第1～3学年)→【領域の教科化】(小学校第4～6学年)→【教科等の総合化】(中学校)の各過程を設けている。また、「領域の学習」には、「ことば領域」「かがく領域」「ひょうげん領域」「くらし領域」を設定している。

本研究では、「ことば領域」の中に書写の学習を位置付け、子どもの学びを高めるためのツールとして水書用筆を活用する。

2-2. 本単元設定に際しての子どもの活動

本年(2021年)5月上旬の「学校探検」で、学校内にある丸池周辺に腰かけ、手に持った花びらを水につけて丸池の縁に線をかいていた児童のつぶやき「花びらに水をつけたら筆みたいだな」を学級全体に紹介したことをきっかけに、子どもが各自の経験から毛筆に関して知っている内容を共有できた。

続く6月上旬に、水書用筆との出会いの授業を設定した。自分の氏名が記された水書用筆を手に持った子どもたちの表情は、喜びと不思議さ、早く何か書いてみたいとの思いで満ちていた。実際に筆に水をつけ、思い思い自由に、自分の名前や書きたい文字を書いたり絵を描いたりした後の振り返りの場面では、普段使用している鉛筆とは異なる筆の書きやすさに驚く子どもの姿があった。その理由を問うと、「筆先が柔らかいからではないか」との考えが出された。



【図1】信州大学教育学部附属松本小学校1年東組 水書用筆との出会いの授業

(NBS長野放送 みんなの信州「変わる児童の学び」(2021年6月4日(金)放映)より)

水書用筆は、毛筆書写の学習指導を前倒しするための学習用具ではなく、その使用目的には運筆における手や指の動きを学ぶことが含まれる。本単元では、そのための導入として、筆遊びを設定する。

筆遊びには、「領域の学習」としての魅力が内在する。例えば、「ことば領域」では、文字を書く用具としてだけでなく、相手意識を持った読み書きへと広がっていく可能性を持つ。「かがく領域」では、毛筆の大きさや材質と表現した線の太さや特徴の比較から、身近な素材への興味関心を高めることへと展開ができる。「ひょうげん領域」では、クレパスやクーピー等とは異なる毛筆の特徴を生かし

た絵を表現したり楽しんだりすることが可能となる。「くらし領域」では、毛筆自身をみつめ深めていく面白さがある。このような諸活動を通して、子どもの気づきの質の高まりが期待できると考える。

3. 授業「筆となかよくなりたい」の展開

3-1. 本単元のデザイン

(1) 全体目標

いろいろな筆と出会ったり、筆ともっと仲良くなりたく願う子どもたちが、身の回りのものを使って筆をつくったり、筆でいろいろな字や絵を書いたりしながら、液や道具を改良したり、友と考えや字の形やその字の様子を交流したり、遊んだりすることを通して、作り方や遊び方を工夫しながら筆遊びをたのしむことができる。

(2) 本単元で育成を目指す資質・能力

(ア：知識及び技能の基礎　イ：思考力・判断力・表現力等の基礎　ウ：主体的に取り組む態度)
ア：筆の形や種類の面白さに気づき、よりよい筆や自分なりの字の形をつくるために、身のまわりの材料や身近な道具を考え、自分なりの筆を作ったり、字で表現したりすることができる。
イ：友だちと協力しながら、身の回りの物を利用して遊びを工夫している。
ウ：友だちと筆の形や材料、その大きさややわらかさやかたさとの関係に着目しながら、筆を使った遊びに関心をもち、友だちと関わりながら楽しく遊ぶことができる。

(3) 本単元設定の子どもの活動

学校探検（4月～5月）

↓ ○こんなものを見つけた　こんなことをやってみたい　○学習者の発見　○つぶやきの紹介

筆との出会い（6月上旬）

↓ ○自分の筆との出会い（水書用筆）　○自分の筆で書いてみよう（6月2日NBS取材）

筆のおもしろさに気づき、なかよくなる（7月）

↓ ○筆についてもっとしりたい　○筆となかよくなりたい（本時）

水書用筆を使用する筆あそび（2学期 前半）

↓ 水書用筆を使用する書写の学習（2学期 後半）

- ・もっと筆で書いてみたい
- ・鉛筆よりも（先が）やわらかくて書きやすい
- ・なんだかさらさらと書ける

3-2. 本時案

(1) 本時のねらい

いろいろな筆遊びがあることを知り、もっと身近な素材で筆遊びをしたいと願い始めた子どもたちが、筆でどのような文字や絵を書く（描く）ことができるのか考える場面で、筆の大きさや筆先になる素材に着目して、文字や絵をかいたり比べたりすることを通して、筆遊びを楽しむことができる。

(2) 本時の位置

全時間 10 中の第4時

(3) 指導上の留意点

○いろいろな太さの筆や筆の材料、大きさの異なる用紙を用意する。

(筆遊びで工夫する視点を明確にしたり、得た気づきを次に生かしたりしながら活動することができるように、多種多様な材料を用意する。)

(4) 展開

目標	全体	筆となかよくなりたい			全体的な指導上の留意点
	個別	T児	A児	B児	
	主な学習活動	全体および個別の具体的な学習と支援の手だて			
導入	1 前時を振り返る	○大きな字を書くにはどうすればよいのかな			◇これまでわかってきたことから、本時やってみてみたいことを確認する。
	2 追究の見通しをもつ	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">学習問題 自分なりの筆でどんな字や絵が書くことできるかな</div> ○もっと太い筆にしてやってみたい。 ○自分の鉛筆で書いた字と筆で書いた字をくらべてみよう。 ○先がかたいもので書くとすらすら書けるか試してみよう。			
	学習課題	筆の大きさや筆先になる素材に着目して、字や絵をかいたり、比べたりしたらよさそうだ。			
展開	3 筆遊びを繰り返し試したり、比べてみたりする。	○葉っぱをたくさん輪ゴムでしばって書いてみるぞ。 ○字は太くなったけど、なんだか線がいっぱい入っていてきれいじゃないね。	○なんだか線が太くなったり、細くなったりしておもしろいな。 ○筆でもっといろいろな色を使ってみたらどうかな。	○木の棒に水をつけて書いたら、あまり字がかけないな。 ○筆で書いてみると、いつもよりもかっこいい字に見えるぞ。	◇子どもがそれぞれの自由な表現を楽しむことができるように教師は素材の特性を掴んでおく。
	4 本時わかったことや考えたことを全体で共有する	○筆が太くなると、字も大きく太くなった。	○鉛筆だと細かい字や絵をかくことができる。筆でかくとなんだか面白い絵になった。	○書きやすさって、いったいどういうことだろう。	
まとめ	5 本時の追究を振り返る	○もっともっと大きな字を筆でかいてみたい。	○鉛筆と違って、筆で書いてみると、太い線と細い線ができる。	○次はどれだけたくさん字が書けるか時間をはかってみよう。	◇わかったことを共有し合い、次時への追究につなげる。
評価		○線の太さを意識して筆遊びを楽しむことができたか。(つぶやき、発言、活動)	○筆遊びを楽しむことができたか。(つぶやき、発言、活動)	○書きやすさを意識して筆遊びを楽しむことができたか。(つぶやき、発言、活動)	

4. 展望と課題



【図2】子どもたちの身近な素材で「筆」を自作して試みた筆遊び(写真提供：東條ちひろ氏(教職大学院生))

本時の授業において、自身の求めた活動ができなかった子どもは皆無である。「自分が作る筆」として割り箸の先につけられた素材は、スポンジ、綿、毛糸、エノコログサ(猫じゃらし)、花と多岐に亘る。その姿は、大きく捉えれば、まるで「『人類が“書く”』とはこのように発展してきた(我々の祖先はこのようにして筆を発明した)」との縮図を垣間見るかのようなだった。子どもたちが筆自身を追求する姿勢は尊い。本時を「領域」の段階における「遊び」の延長と捉えた際、このような展開も成立する。本時は「探求」のよさを最大限に生かした授業の展開例である。

一方で、本時は未だ「探求」の段階でとどまっており、この「学び」のゴール、すなわち「学習」としての目的が希薄となってしまった感も否めない。この活動の行き着く先にはどのようなねらいがあるのか。この活動における子どもたちのめあては何なのか。そもそも「筆となかよくなる」とはどういうことなのか。筆となかよくなるとどんなことが起こるのか。筆となかよくなってどうなりたいのか。つまり、この活動の先にはどのようなゴールが待っているのか。筆で何をするのかを見通したい。

改めて本時を振り返った時、本時の活動が文字に向かっていた子どもはどれだけいたのか。活動の先には常に「文字」とのゴールがあり、全てはそのゴールに向かっていく。多様な道筋があってもいい。しかし、全てはゴールへ辿り着くための道筋である。道の先のゴールを見失わないことは必至となる。

「遊び」を「学び」と捉えて、この学年において本当に大事にすべきは何なのか。意図があつての「遊び」を仕組みたい。「毛筆」という材、「毛筆」の発見、「毛筆」の発明、「毛筆」の特徴を、どのように文字の学習へとつなげていくのか。本時では「painting」もしくは「drawing」の段階にあった活動を、どのようにして「handwriting」の学習へといざなうか。このように考えると、現段階では未だ水書用筆を与えず、子どもたち自身の創造を受けた上での完成品として、もっと後の段階で水書用筆を渡す方が効果的であったかもしれない。自分たちの発見発明があつて、初めて水書用筆に出会う。

「遊び」から「学び」へ — 教師の思考及び判断をふまえ、子どもたちにどのように働きかけるか。これからの課題である。

謝辞 本研究は、信州大学教育学部 附属松本学校園 幼小中一貫教育推進委員会での研究活動に基づいて試行したものである。この場をお借りして、関係の先生方に感謝の意を表します。

また、本研究は、令和3年度信州大学教育学部学部長裁量経費プロジェクトの助成を受けて実施したものである。